

こんびら山古墳とふくざく谷横穴群

赤 星 直 忠

序

久里浜南端のこんびら山頂に前方後円墳の存在することは昭和二十六年五月、筆者が市立工業高等学校に赴任した直後、二階の窓からみたこんびら山頂にそれらしいものをみたことがきっかけとなって確認された。当時山頂は開墾されて墳頂も畑になっていた。こんびら山をめぐる谷々に横穴の存在することは同所伝福寺の鈴木慶起氏や野比の田浦正明氏から聞き、又横須賀考古学会諸君の踏査によって認められていた。こんびら山古墳を発掘しようとの説もあったが、三浦半島では池田の大塚古墳と共にただ二基の前方後円墳であったし、大塚古墳が昭和二十七年発掘調査されたので、これは手つけずに残そうとの意見になっていた。それにこれは後円部頂が一メートル余も削られていたので恐らく主体部が失われているであろうと考えられていたからでもあった。然るに昭和三十一年暮、久里浜に火力発電工場建設のため付近の山を切崩し、大埋立をするとの噂があったので、横須賀市博物館としてはこんびら山切崩に備えて、山頂の前方後円墳の実測を行った。越えて昭和三十二年夏になると埋立工事のことは確実となり、十月十五日には東電会社から上村新策氏が来館して切崩予定地内の古墳及び横穴に関して聞きただして帰った。十月下旬、東電会社から切崩工事実施につき、それ以前に古墳及び横穴の調査をされたき旨の申入があり、十一月十日まで工事を待つとのことであった。本館では直ちに羽根田館長から市及び県へ連絡、市当局の理解のもとに追加予算を得て十一月四日より十日まで七日間、発掘調査を実施した。調査参加者は次の通りである。

委員長 羽根田館長

担当 古墳―赤星直忠、横穴―高橋恭一、記録スライド―柴田敏隆、佐藤克己

援助 横須賀考古学会（岡本勇、村越潔、神沢勇一、西条好晴、野島昭子、須賀由也、市立工業高等学校郷土研究部生徒）山田修、鍋島菊雄、久里浜中学校教諭及び生徒、武相高等学校生徒、日本大学高橋四郎、茂申昌夫、他に入夫毎日十名

こんびら山前方後円墳

所在地

横須賀市久里浜海岸の南端。住吉神社の南側に西から東へ延びた尾根がある。先端を俗にこんびら山とよび、もとこんびら社があったところである。古く久里浜湾は西方に四キロ余も深く湾入していたから、こんびら山を先端とするこの尾根は深い入江の南側を抱く形であった。従ってこんびら山は海中に突出した半島の先端部といった位置にあり、しかもこの尾根は海拔六〇メートルの高さを以て海に臨むものであったから、その先端部は極めて景勝の地を占めたものであった。この尾根は久里浜伝福寺の南側にそびえる海拔七五メートル高地から東にのびた一支尾根であり、この南側の谷を「ふくざくや」と呼び、この谷に面したこんびら山南山腹と、こんびら山の北側の谷とに横穴群がある。

発掘前の古墳状況

本墳が古墳であるとの伝はなかった。従って終戦後軍用地から解放されるとすぐその頂上は開墾されて畑地となった。本墳後円部頂が削平されているのはこの時の開墾によるものでなく、以前（恐らく江戸末期）こんびら社が建てられた時（創立年代不詳。今回調査中この部分の表土から寛永通宝数枚及び江戸期の瓦を出土した。然し相模風土記―天保十四年稿―にこの社の記載がないからその後のものと考ええる）。古墳とは知らずに、沖を通る船の目標にもこの尾根先が選定されたものであろう。この時建物に必要な面積を得るため古墳頂上が約一メートル削平されたものと考えられ、この土は主として古墳くびれ部の北側に移され、敷地が拡大されたものである。本墳が古墳であると知られたのは昭和二十六年五月で、この時後円部頂も畑になっていた。

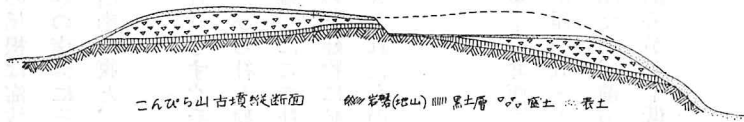
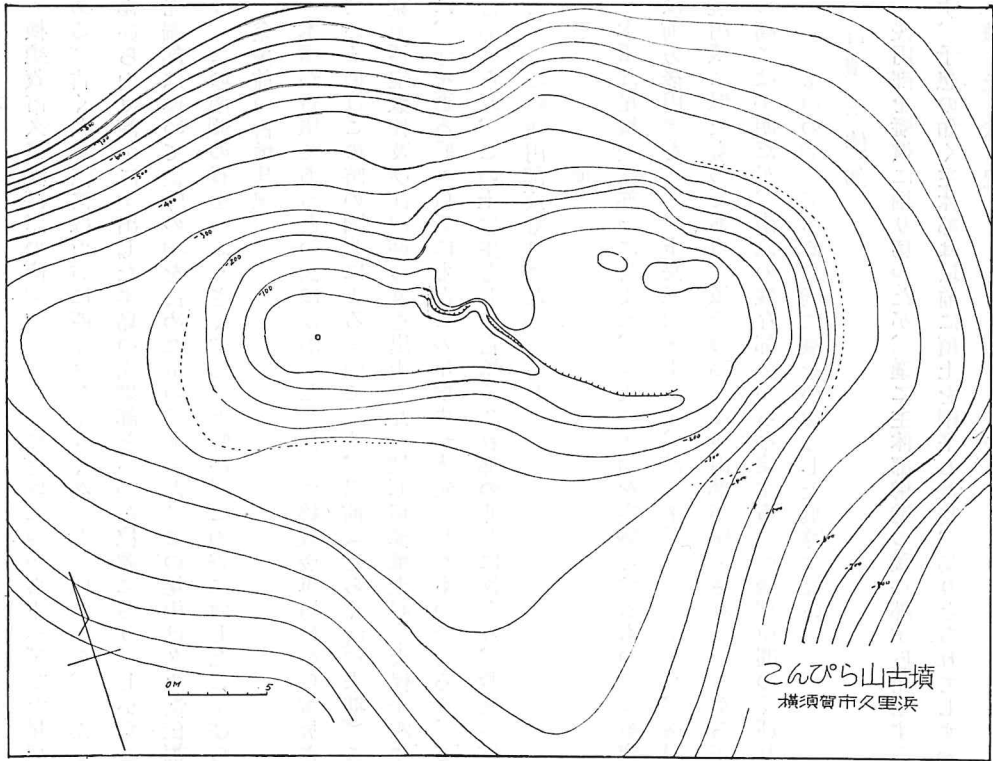
形態

本墳は尾根先端部頂に営まれ、尾根の方向を主軸とするもので（東南東―西北西）尾根先端即ち海の方向に後円部を置いたものである。平面形は前方後円形をなし、全長三四メートル、前方部径一一メートル、後円部径一五メートル。平面形は前方部が大きく開かないむしろ古い形の前方後円墳に似たものである。墳丘の高さは後円部が削平されているから不明だが、前方部での高さは南側の平地面から二・五メートルある。後円頂の高さは不明だが、南側の残存部分から推定すると前後部中間のくびれ部分が若干低くなるだけで、前方部頂と後円部頂との高さはあまり違わなかったものの如くである。周に濠をめぐらした痕跡はない。

古墳主体部

後円部を縦横に堀り切ったが、遂に主体部構造の残存部すら発見することが出来なかった。前方部にもくびれ部にも何等の構造部分を発見せず、予想の如く主体部は以前に頂上を削平した時、切りとられてしまったものとする他はない。

墳丘状況



第1図 こんびら山古墳

墳丘状況を調査するため、巾一メートルのトレンチが主軸に平行に古墳を縦に掘り切り、更にこれに直角な数本のトレンチが後円部、前方部、その中間に堀られた。その結果、本墳は尾根先端のより上った部分に営まれたもので、尾根中心線より北に寄せて計画せられ、主軸の前後（東西）端及び南側は削りとられ、その土を盛り上げて前方後円形が成されたものであることが明になった。北側の裾はそのまま丘の北斜面となっているが、南側にはやや広い平場が作られた。古墳がこのように尾根の中心線からはずれて計画されるのはその前面に祭場としての広場の必要上からであったと考えられる。断面でみると古墳の基底部は泥岩の地山からなり、その上面は風化し細かに砕けた塊の堆積となり、その上に直接黒色土を覆い、その境は不明瞭である。然るにこの黒土の表面とその上に盛られた地山を砕いた岩塊と土との混合物との境は極めて明らかで、これが盛り上げられたものであることがはっきりしている。（前方部の最も厚く盛土された部分では六五センチ、後円部で七〇センチに及んでいる）。その表面はその後草などの生じたために出来た黒土で覆われている。

考察

(1) 位置について—本墳の尾根先端部でのあり方は

本墳の北西三キロにある横須賀市池田、大塚台にある大塚前方後円墳（当時は本墳とは内川入江を越えた対岸、註1）と全く同じである。共に西から東へ延びた尾根の先端部であり、後円部を尾根先にむけている。大塚古墳にあっては尾根の中央に位置し、北側及び南側に平地を作っているが、本墳にあっては尾根の北に片寄り、南側にだけ平地がある。前方後円墳がその側面に平地を持つことは本県においては普通のことのように、横浜市保土ヶ谷区瀬戸谷前方後円墳においても同じであった。瀬戸谷古墳では南側に平地があり、形象埴輪の各種がこの平地に面した側にだけ配列していたことはこの平地の意義を考える上に重要な点である。筆者は前方後円墳の側面にある平地を祭祀の場所と考える。瀬戸谷古墳がこの平地に面した側にはのみ形象埴輪を配列したことはこの面が正面であることを意味し、即ちこの平場で祭祀が行われたと考えるものである。本県に於いて前方後円墳が行われた時期にはこの墳全体を横からみた方向が正面と考えられたものと考える。即ち大塚古墳南面（南側の方が広い）の平場も、本墳南面の平場もそれが祭祀の場所であり、その平場に面する側が古墳の正門と考えられたものと思う。主体部は後円部にあったと思われるが、本墳では不詳。大塚古墳は後円部にあり、主軸に平行の位置に埋葬せられていた。それは粘土土床上に作られた舟形に似た浅い粘土土棺であった。本墳が後円部頂を削られたとき全く何ものにも注意されることなく破壊されたのは恐らく大塚古墳にみる如き粘土土床乃至粘土土棺にすぎず、しかも極めて僅の遺物しか存在しなかったによるものと思われる。本墳は尾根先端部の最高所を選んで営まれ、周囲の土を削って盛り上げ前方後円形とされたものであり、墳丘には塚をめぐらすこともなく、葺石もない。且つ埴輪も立てられなかったものである。この点は大塚古墳と全く同じである。三浦半島の古墳で埴輪の存在が確認されたものは三浦市三崎町向が崎大椿寺裏山古墳（註2）だけであり、この他に埴輪断片の発見されたのは三浦市南下浦町金田の小字金堀塚の畑、横須賀市八幡字蓼原の畑（註3）、同八幡八幡社境内及び其の付近の三カ所で、これらは古墳が破壊され、開墾されてしまったものであったと解してよいかも知れない。これらと本墳との年代上の関係は全く不明であるが、近接した時期であろう。

(2) 年代と被葬者―出土品や主体部構造の全くない本墳にあっては築造年代の推定に役立つものは何もない。然し当地方でこの種の前方後円墳が行われた時期がそう長い期間を持つとも考えられないし、所在位置の類似や形態の類似からこれが大塚古墳と甚しい時間のずれはないものと考えて大きい誤はあるまい。大塚古墳が裏面に青海波文のある須恵器甕や黄色ガラス小玉の存在などによって、又墳丘の形態及び主体部構造に比較的古い様式が認められることによって、古墳時代後期の比較的早い時期のものとして推定されているので、本墳も亦大体これに似た時期のものと考えてよいであろう。

本墳被葬者は大塚古墳と同じくこの地方の豪族であらねばならない。大和の大豪族が営む墳墓の形を模して作り得るだけの権力の所有者であったことに論はあるまい。墳丘の大きさは大塚古墳と大差なく、やや本墳の方が大きい。古墳の大小を以ってその権力の大小を比較するとして本墳

	長	後 円 径	前 方 部 径	高
大塚 古墳	三三米	一六米	一〇米	一・二五米
こんびら山古墳	三四米	一五米	一一米	二・五米

の主にやや権力を認めるとしても殆ど差がない位である。内川入江周辺を含む三浦半島の主要地に権力を持つ豪族が同時に二人いたと考えることは土地が狭すぎるから不都合である。この両古墳の被葬者は相接する二代の権力者と考えたい。

(3) 村落の所在—この時期の村落がどのあたりにあったかについて知るにはまだ資料が甚だ少い。この時期を古墳時代後期と考えると、この時期に一般に用いられた土器は土師器である。須恵器は祭祀には用いられているが、一般日用品としてはあまり使用されていなかった(市内なだぎり遺跡発掘結果によってもこれは証される 註4)。我々はこの時期の土師器を鬼高式と呼んでいる。この時期に属する土師器が散在若くは包含されている場所は発見されたものがあまりに少い。

横須賀市追浜なだぎり遺跡

” 鴨居八幡社及び其の付近

” 八幡宇蓼原

三浦市初声町三戸

これでは村落について考えることが出来ない。同時期の古墳や横穴位置によってその付近であるとの村落の推定は出来るにしても、まだまだ確実なことは言えないのである。対岸房州との海上交通の要地としての内川入江沿岸に村落が考えられるけれども、それら村落に権力をふるうことの出来た者が何処にいたかについては全くわからないのが現状である。

結 び

要するに本墳は三浦半島に現存した二基の前方後円墳の一基であったが、恐らく江戸時代末期に後円部頂が削平せられてこんびら社が作られたとき粘土槨などの如き不明瞭な主体部であったため、土と一緒に遺物が運び去られてしまったものと思われ、今回の発掘に際しては主体部を発見することが出来なかった。尾根先端部の北寄りに位置が選ばれ四周の土を削って其の上に盛り上げて整形されたものであり、古墳の南側に祭祀の場所としての広場を持っていた。本墳は後円部頂を削られていたので充分な形を知ることが出来ないが、恐らく大塚古墳と似たものであったと考えられ、位置と形とから大塚古墳と近接した時期に営まれたものと考えられ、被葬者は大塚古墳と共に三浦半島をその権力下におさめていた豪族で

あったと推定し、大塚古墳との類似から両者が相接する二代の支配者であったと考えるものである。而してその年代を古墳時代後期の比較的早い時期のものと考えられるものである。

(付記)

墳丘出土の石鏃

本古墳とは直接関係のないことの明瞭な石鏃が墳丘盛土中から発見されたからそれについて付記する。

盛土状況調査のためトレンチが後円部中央を南北にたちきったが、後円部南側斜面トレンチ内に落ちこんだ土にまじって落ちていた石鏃を拾ったもの。二等辺三角形の底辺を深く彎入させた、芋の葉に似た形。長三・六センチ、かえり部巾一・七センチ、厚〇・六センチ。黒耀石製。其の形から当然先史時代遺物であり、この形のものには縄文中期遺跡から出土することが多い。こんびら山には先史時代遺跡はないようであるが、尾根に続く背後(約四〇〇メートル距つ)にはこの辺で最も高い部分があり、頂上がやや広い。此処に縄文早期に属すると見られる無文土器が出土するが、本石鏃は勿論この時期のものではあるまい。本古墳の北側の丘裾には尾根先と尾根先との中間に狭い平地があり、これに続いて北方に一段低い海岸段丘部分がある。この部分は上部二メートル位が砂層であり、この中に弥生式後期に属する土器片を含む。この砂層の下に約一メートルの厚さに貝層があり、その下は砂と岩塊との混層である。この貝層中に僅ではあるが縄文中期の土器(勝坂式)片を包含する。この土器片はひどく磨りへっており、これが水中に於て波で洗われ貝殻と共に堆積したものであることを知る。即ち本遺跡は貝塚でなく二次的のものであると知られる。恐らくこれに近接した部分に遺跡があつて海中に捨てられた土器片が堆積したものと考えることが出来るが、その遺跡が存在したと考えられる部分の土は戦時中に巾広く切りとられ海岸の埋立に使われたので、現在では全くその遺跡を知ることが出来ない。本遺跡を久里浜遺跡——勝坂式土器——と命名し、本遺跡の土器を包含する貝層を久里浜第二次堆積遺跡と呼ぶことにする。これより約一五〇メートル西方の伝福寺境内から硬玉製曲玉一個が採集され同寺に蔵する。一般の常識からすれば硬玉製曲玉は縄文中期遺跡から出土する例が多いと知られている。恐らくこれも本遺跡の遺物と考えられ、こんびら古墳盛土中から検出された黒耀石石鏃も恐らくこの遺跡に属する遺物として誤らないものと考ええる。

(註) 1 「横須賀市大塚古墳」(赤星直忠) 神奈川県文化財調査報告 第一九集、昭和二十八年

2 昭和三十三年春、城ヶ島架橋工事に際し、大棒寺裏山の切割をしたところ墳断片多数が発見された。もと此処は円墳状高地であったが、頂上を削平し其の土を四周に積んで土塁とし半僧坊を建てたと云う。墳輪はこの時多数出土したものと考えられるが、誰にも気づかれず其の一部がかた

めて一隅に埋められていたものらしい。三崎高校の浜田先生が調査した結果、土壘外側に古墳の一部と思われる部分が残存し、円筒破片が一メートル間隔に発見された。先に出土した埴輪の大部分は三崎中学校生徒によって掘り出されたもので浜田先生が復原に努め、馬、かぶと、女子が大体形を整えた。

3 「横須賀市における形象埴輪の出土について」(赤星直忠)考古学雑誌第二十八巻第六号、昭和十三年

4 「横須賀市なたぎり遺跡」(赤星直忠)横須賀市史別冊、横須賀市博物館刊、昭和二十九年

ふくさく谷横穴群

所在地

久里浜海岸の南(伝福寺の南側)にこの辺での最も高い部分(海拔七五メートル)があり、これから東方に二本の小尾根が出ている。北側から数えて第二の尾根がこんびら山である。別に南方に尾根がのびて千駄崎となる。これから東へのびた尾根がこんびら山尾根との間に「ふくさくやと」を形成する。この谷の北側斜面即ちこんびら山の南傾斜面には浅い山ひだが三つあり、それぞれその中腹に横穴群が存在することが以前から知られていた。これがふくさく谷横穴群である。山ひだを東から第一、第二、第三と呼べば、第一のひだに四、第二ひだに三、第三ひだに一の横穴が知られ、更にこれらを連ねる線上に埋もれた幾つかが予想されていた。今回の工事によって第一、第二の山ひだが切とられるらしいことがわかったので、これらを切崩以前に発掘調査しようと計画したものである。第二ひだ(B区)三個中、崖面の一個は手をつけず、西方の一個は落磐のため中止し、東方の一個が久里浜中学校生徒の手によって発掘され、第一ひだ(A区)の二個及びこれにつづく横穴が高橋恭一氏及び横須賀考古学会員によって調査された。従来知られた東方のものと西方のものを連ねる線上に更に多くの埋没横穴が予想されたのでこれが発見につとめ、新たに六個を確め、発掘調査した。この中の左端の一個が以前知られていた一個であるか、別のものであるか明らかでないが従来もただ存在を認めていたに過ぎぬ程度であったから今回調査のときには前回知られたものとしての一個は確認出来ぬままその付近に並んだ一群として検出したものである。

分布

第一ひだと第二ひだとの間が切とられて崖となり、この切とり面に横穴の断面をみせている分は時間の都合で調査せず、新たに確認した分から第一―第六とした。第一は崖面に横断面を露出しているものと略同高、第二、第三号はその右上方に約一〇メートル離れて検出、第四は第三の右上に、第五第六は第四に並んで検出された。恐らくこれにつづく右方に更に埋没することが予想されるが、時間の都合で検出することは出来な

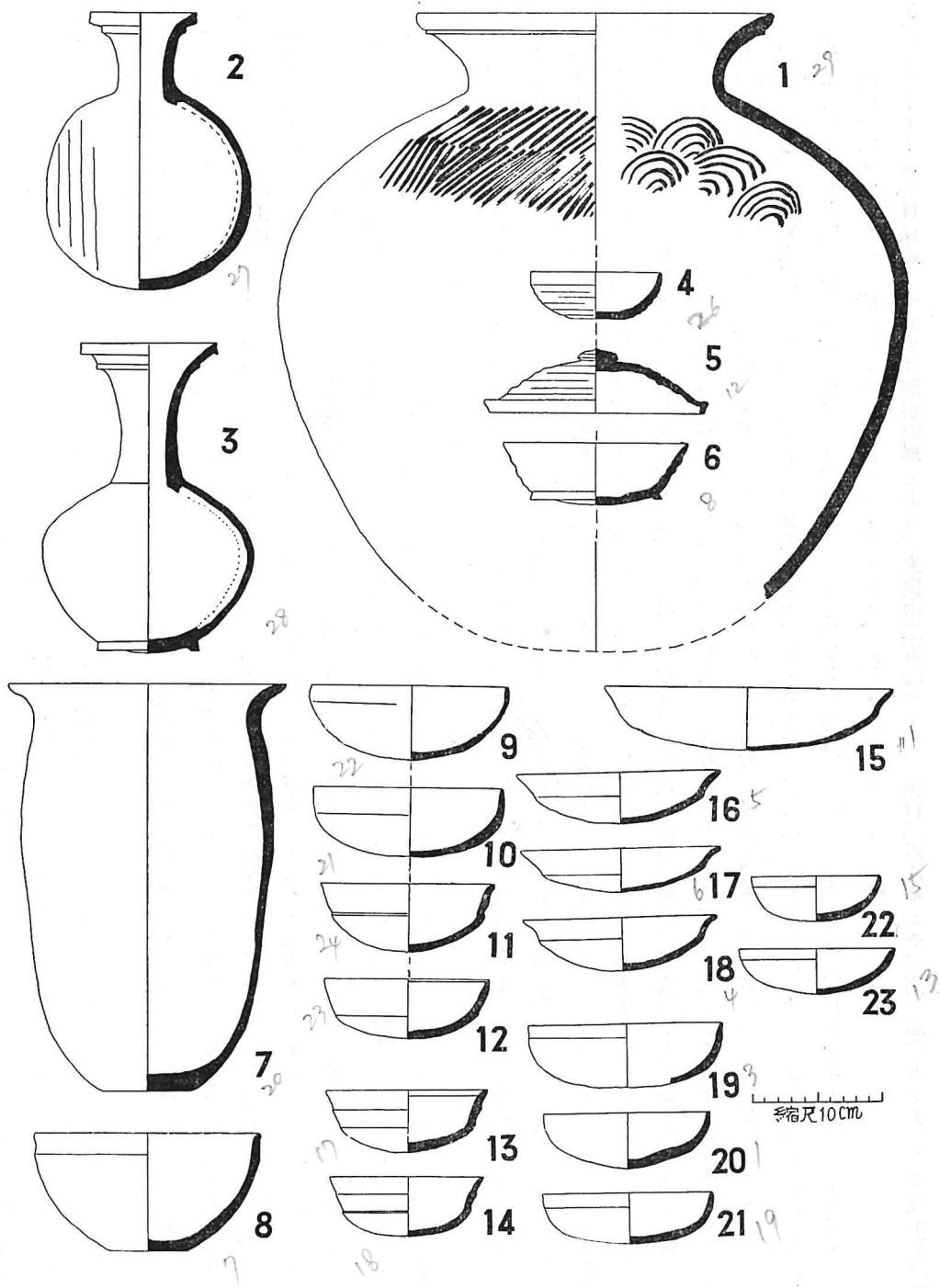
った。第七号穴は第一ひだの東端であり、以前から開口し、その前面に小畑地が開かれていた。以前分布調査に来たときこの畑にて水晶製切子玉一個を拾った。恐らくこの横穴出から出されたものと考ええる。内部は掘り荒されていた。第八号穴は第七号穴と略同高だが切とられた崖面に横断面を露出していたものである。第二ひだのものは第一ひだの第一号穴と略同高、分布は前述の如くである。

横穴の形態と出土品

横穴形態は低ドーム形天井のものとしてアーチ形天井のものとの二種に大別出来る。前者には第二・第七号穴及びB区第二号穴が、後者には第一・第三・第四・第五・第六号穴が属する。低ドーム形天井のものは隅丸胴張矩形の玄室を持つ後期古墳時代に属する横穴の形態を尙残しており、ただ高さを減じた末期横穴（ドーム型H様式）、アーチ形天井のものは奥壁がアーチ形平面を表わし、奥にて中と高さが最大となり、入口に向つて中と高さを次第に減ずる末期横穴であるが、既に前壁はかなり退化し（アーチ型H様式—第三・第四・第五・第六号穴）ており、一号穴に於ては前壁が全く退化して失われ、玄室と羨道との区別がなくなった最末期様式（アーチ型J様式）を示している。横穴形態退化の順序からいえば第一号穴が最も新しいもので、他はそれより古いのがこれに近接の時期のものである。第八号穴は崖にあり、前半を切とられたものである。様式不詳。尙B区第一号は落盤のため形態不詳、第二号穴は低ドーム型、玄室の前壁がすっかり退化してなくなり、玄室側面と羨道側面との境が、く字形を示す程度になったもの（ドーム型I様式）である。

第一号穴：アーチ型J様式。奥中二五四センチ。奥行四〇〇センチ、羨門中七四センチ、奥高一六七センチ。既に盗掘されたもので、奥壁に近く覆土上に下肢骨断欠一、左隅に接して枕石（波で洗われ角のとれた不正楕円形扁平の凝灰岩塊）が露出していた。覆土取除中、土に混じて人骨の小片が奥半部に散乱、奥壁に近く右方に下肢骨断欠二本並列、奥中央辺に頭骨片と大腿骨を認めた。頭を左にし奥壁に平行に埋葬されたものであろう。土器片は右奥に坏片二、室中程左寄に坏半欠一、室前方に坏片数個。羨門に近い部分に羨門閉塞に使われた岩塊の一群が残っていたが、この部に坏半欠一、左壁に接して伏せられた坏一、閉塞岩塊下に坏一を検出した（神沢勇一担当）。遺物：土師器片四一として検出されたが、六個の坏として復原された。中三個は丸底の普通の坏であるが、直立した口辺外側の一センチ乃至一・五センチ以下は底部にかけてへらを以て整形されたものである。(1)径一二センチ、高三・五センチ約三分の一の断欠から復原。地色灰褐色。黒塗されたもの。(2)径一二・三センチ、高三・五センチ、半欠から復原。淡赤褐色。(3)径一三センチ、高四センチ、略完形に近いまでに破片があった。少しいびつ。淡赤褐色。他の三個はへらで整形された丸底で側面と底との境に低い稜があり、側面はゆるく外反しつつ口縁に向つて開くもの。何れも淡赤褐色。(4)径一五・六センチ、高四センチ。(5)径一四・九センチ、高四センチ。(6)径一五・五センチ、高三・五センチ。

第二号穴：ドーム型H様式。平面形は胴張矩形であり、玄室中二五〇センチ、奥行二六八センチ、高一四〇センチ。羨道は中央になく、右に偏



第2図 ふくざく谷横穴群遺物 (2~6 須恵器、7~23 土師器)

っている。従って前壁の名残は左に七〇センチ、右に一五センチとなる。羨道長一四五センチ。羨門中七五センチ。本穴も既に盗掘されたもの。人骨小片は奥壁に近い部分に散乱状に点々と検出。右奥に頭骨小片一、中央部奥に少しよった部分に歯一本検出、別に右壁に近い中程に粉状になった人骨の一片が壁に平行にみられた。これによって奥壁に平行の一体と右壁に接して右壁に平行の一体の埋葬が考えられる。土器片は左奥に近く鉢形の断片が散在しただけ。奥壁に近く右奥から刀子断欠二（同一個体に属すると思われる頸部断欠と先端部断欠）、（村越潔・神沢勇一担当）。遺物：土師器片一二片として検出されたもの。鉢形土器として復原された。淡褐色。部分的に黒色。内面へらみがき。口辺に近い外側一・八センチ以下はへらで整形されている。平底。径一七センチ、高九・五センチ、底径六・二センチ。刀子は身部と頸部とに折れ、その中間の若干を失ったもの。身部は比較的細く、頸部がむしろ太い。或は各別個のものであるかも知れない。

第三号穴：東向。アーチ型H様式。玄室奥中二一〇センチ、奥行三五五センチ、前中一四三センチ、奥高一六八センチ。退化した前壁が僅に左に九センチ、右に二〇センチ残る。羨道長一〇〇センチ、羨門中八〇センチ。本穴も盗掘されている。玄室奥に近く少し右寄部と中央部左壁に近くとの二カ所に凝灰岩扁平の枕石（波で洗われて角のとれたもの）があった。枕石付近に人骨片を僅か認めただけ、枕石が共に左方にあることから奥壁に平行に埋葬された二体が推定される。奥壁に近い中央部、第一枕石に近く須恵器断欠数片。玄室前方右隅に高台付の須恵器坏一個検出（山田修担当）。遺物：(1)須恵器断欠六として検出されたものは高台付坏として復原された。径一四・二センチ、高四・五センチ。高台径一〇センチ、丸底から側面へ移るところで急にく字形に内彎し、側面となりゆるく外に開くもの。側面がく字形に内彎し底になる部分に低い外開きの付高台がある。側面には数本の低い凸凹をめぐらす。(2)須恵器小片四片。これは蓋の縁の部分である。縁は単にく字形になるだけ。蓋面には低い凸凹をあらわす。高台付坏と一組になっていた蓋坏の蓋部分であろう。(3)須恵器小片七片。灰白色。一部に吹出釉がある。肩の部分のゆるい折れ曲りから平瓶の肩部分と考えられる。

第四号穴：北東向。アーチ型H様式。玄室奥中二九〇センチ、奥行三一〇センチ、前中一七七センチ、奥高二一〇センチ。退化した前壁は左側二二センチ、右側一五センチ。羨道長一五〇センチ、羨門中七〇センチ。本穴も盗掘されている。奥半部に人骨細片散在。右方に臼歯一、上膊骨断片、頭骨片、中央辺に上膊骨片、大腿骨片、左壁に接して脛骨片がみられた奥壁に平行に右方を頭にした一体の埋葬が推定出来る。奥に近い中央辺に須恵器蓋断欠と土師坏断欠、玄室右前方隅に土師坏一が検出された（岡本勇担当）。遺物：(1)土師器盤形大片とこれに属する小片四は径二二センチ、高四・六センチの大盤として復原された。丸底から側面へ移行しようとする部分で低い稜をなし、側面はゆるい外反をする。底部はへら整形。内面から外側にかけて丹塗となっているらしい。(2)須恵器四片は蓋として復原された。径一六・三センチ、高四・九センチ、表裏ともに低い凸凹をめぐらす。縁は一旦少し上り、直角に近くやや内へ折曲る。つまみは扁平宝珠形、肩の部分で稜をなし側面は少し彎曲する。

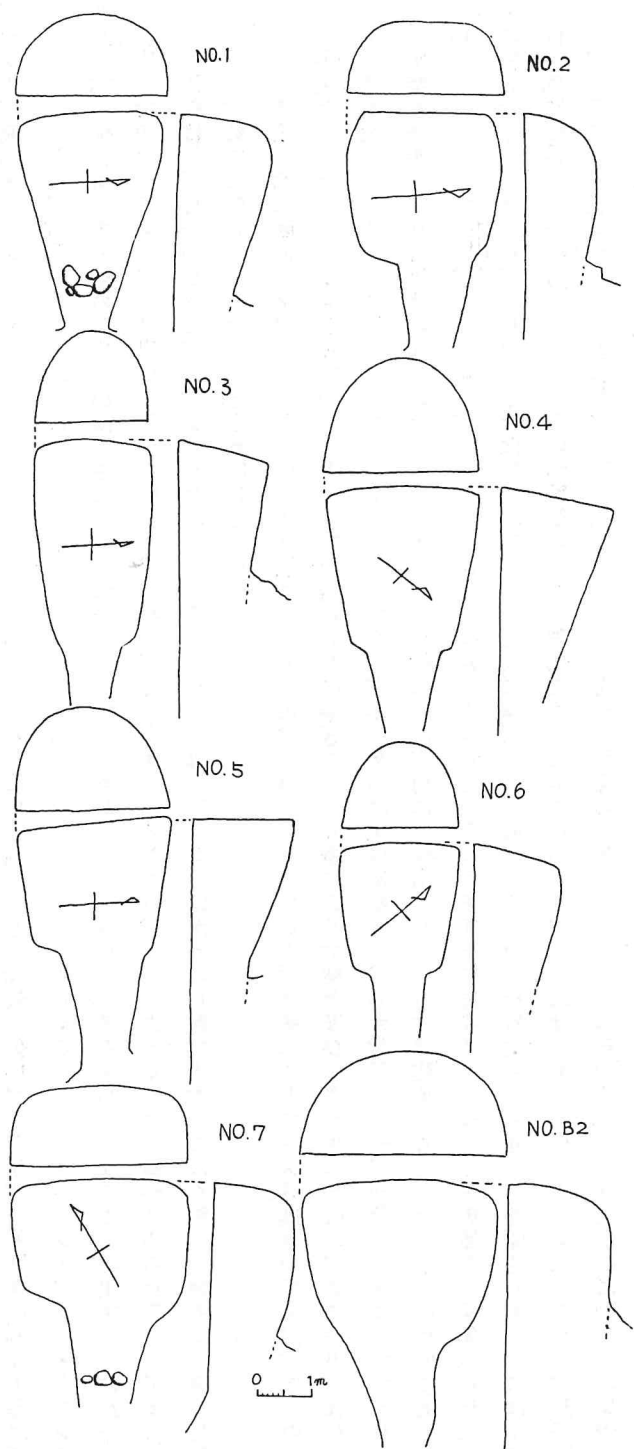
第五号穴：アーチ型H様式。東向。奥中二八二センチ、奥高一八五センチ、奥行二三五センチ、前中二二二センチ。退化した前壁は左側五〇センチ、右側二〇センチで、羨道が右に偏っている。羨道長一八〇センチ、羨門中八〇センチ。本穴も盗掘されており、人骨小片が奥半部に散乱し、大腿骨断欠は右奥に二本検出されたから本穴に於ても奥壁に平行位置に埋葬されたものと考えられ、頭は左方に向いたと思われる。奥壁に近い左側に土師器坏一個、それと少し離れてその前方に土師半欠一、羨道においては玄室に近い右側に伏せられた土師坏一、左側に同じく伏せられた土師坏一を検出した（村越潔担当）。遺物：何れも土師器。(1)口縁部を少し欠いただけの坏。径一二・七センチ、高・四三センチ。外側一センチばかりが直立し以下は外彎しつつ底に移行する丸底。底はへらで整形されたもの。(2)径一〇センチ、高三五センチの坏として復原された。形は前者と全く同じ。(3)他に坏として復原されることの明らかな断片が七片あるが復原出来ない。

第六号穴：アーチ型H様式。南東向。奥中二一八センチ、奥高一五八センチ、奥行二五〇センチ、前中一五五センチ。退化した前壁は左三〇センチ、右二五センチ。羨道長一三〇センチ、羨門中八〇センチ。本穴も盗掘されている。人骨状態不詳。奥半部中央辺に土師坏片散在（村越潔担当）。遺物：土師器小断片一三、坏として復原されるべきものであるが接着出来ない。

第七号穴：ドーム型H様式。南西向。隅丸矩形の崩れた形。奥中三二五センチ、奥行二一七センチ、前中二九〇センチ、高一五〇センチ、羨道長二三五センチ、羨門中七五センチ。他にくらべて羨道が長い。羨門外からその前方にかけて十分の三の急傾斜になっている。前庭部には何等の施設も祭祀のあととみられない。羨門から少し入った部分に羨門閉塞に使われた岩塊が一行に残っていた。玄室内部は盗掘されているので内部全面にわたって人骨片が散乱していたが、奥半分に特に多い。他の横穴に比して内部が乾燥しているので人骨の保存が可成よい。頭骨は左壁に近くやや前方に一個と右壁に近く右前方に一個が検出された。右方頭骨付近には顎骨があり、左前方には大腿骨及び上膊骨がみられるなど甚しく散乱し、埋葬時の方向を推定することが困難である。頭骨が共に比較的前方にあつたことから或は奥に足をむけ、入口に頭をおく方向即ち主軸に平行な位置に並列されて埋葬されたかも知れない。玄室中央少し右寄部に土師器坏断片が散在し、玄室に近い羨道左奥に土師器壺が倒れた姿勢で検出された。鉄鏃数本が断欠となつて右壁中程に検出されたが、その方向は右壁に平行である。この付近の覆土に混じて喰出罎断欠を検出。左方頭骨付近の覆土中にはく製なつめ玉半欠が混在した（高橋恭一担当）。遺物：土師器壺一、平底の丈高甕で頸部が少しくびれ、すぐに外反して開いた口辺となるもの。高三一センチ、口径二一センチ、底径六センチ。普通住居跡からこしきと対になった水沸用として出土するものと同形。外側面はへらで整形されている。土師器坏片三片は三個の坏として復原された。(1)普通の坏である。直立した口辺外側一・五センチあたりから急に彎曲して底に移行し丸底となる。底に移行する部分から下はへらで整形されている。径一三・九センチ、高四・九センチ。(2)丸底から低い稜を作つて側面に移行する。側面はゆるく外に開く。側面中程に低い段が一つあること、内縁に低い段が一つあることなど注意されてよい。径一二

二センチ、高四・八センチ。(イ)前者と同形だが底と側面との境にある稜は肩の名残として尙幾分低い肩状を示す。外開きの側面中程に低い段のあることも同じだが、口縁内面の低段は口縁から若干離れたところにある。黒塗であったと思われる。径一一・六センチ、高四・七センチ。鉄鏝は断片二六。何れも尖根鉄鏝の断片だが復原されたものは一例もない。腐蝕がひどく、身部の形態を明らかにすることの出来るものが甚だしい。(イ)切出形で頸のあるもの、(ロ)切出形で頸のないもの、(ハ)身が短く左右両側に刃があり、両頸のあるものの三種が認められる。(ロ)が多いようである。喰出鏝は約三分一の断欠で、存在を知ったにとどまる。なつめ玉は径二センチばかりの比較的大きいこはく製。発掘中に折損したらしく半分しかない。破口は新しい。表面はひどく風化している。

第八号穴：崖面に断面を露出していたもの。天井崩壊により内部は岩塊がつまっていた。調査に際して尙天井崩壊の危険が大きいため奥部の調査は出来なかった。即ち断面から約一メートルの間を発掘したに過ぎない。左壁に近く大腿骨及び脛骨が壁に平行な位置に検出されたのは入口に頭をむけ主軸に平行に埋葬されたことを語るものである。左半部からは須恵器甕半欠、同台付長頸瓶一、同瓶一（奥にむいて倒れる）、同坏一、土師器坏四（何れも伏せられていた）、刀子断欠一（主軸方向に直角に）検出された。本穴は盗掘されていない唯一の横穴であったが、前半を切とられたものであり、且奥部を調査することが出来ずに終わった（市立工業高校郷土研究部担当）。遺物：須恵器甕、採集された二五片からは縦に割れた半分の甕が復原された。半分は崖切取工事で土と共に運ばれたものである。肩の比較的丸い丸底甕、外開きの短い頸には文様はない。口縁外側に低い段が一つ付加されているのが特徴の一つ。胴部表面にたき目があり、内面には青海波文がある。高四九センチ、胴径四七・五センチ、口径二六・五センチ。須恵器瓶は球形の胴にやや長い頸をつけたもの。胴は左右二つの椀形を真中でつけたものに別にその接合点に頸をつけたもの。普通に下から作ってゆけば簡単に出来るものをわざわざ左右二つにわけて胴体を作り、別の頸をつけるところに発生を考えさせるものがある。恐らく横瓶の退化したものと考える。口縁外側に低い段が一つ付加される特長は甕にも長頸瓶にもみられるところ。高二一・四センチ、胴径一五・八センチ、口径七・九センチ、頸長六・六センチ。須恵器高台付長頸瓶は肩が丸くならなことに特長の一つがあろう。やや外開きの付高台は丸い底の周に付けられており実際には丸底が下について安定しない。口縁外側に段を持つことはこれにおいても特長である。高二三・六センチ、胴径一六・一センチ、口径一一センチ、頸長一〇・七センチ。底径七・二センチ。須恵器坏は平底がかった丸底、底から側面までの間に数本の明瞭な凹凸をめぐらす。側面は直立する。側面と底との間はゆるく、く字形に曲りにくい稜になる。径一〇センチ、高三・六センチ。土師器坏(イ)直立する側面からにぶい稜を作って底に移行する丸底坏。底面はへらで整形されている。径一四・五センチ、高五センチ。(ロ)やや内彎するかにみえる側面からにぶい稜を作って底に移行する丸底坏。底面はへらで整形されている。径一五・二センチ、高五・七センチ。(ハ)へらで整形された丸底と少し内彎しつつ外へ開く側面との境に肩の名残が極めて低い段になって残っている。口辺内縁に低い段をめぐらす。径一二・五セ



第 3 図 ふくざく谷横穴形式図

ンチ、高四・六センチ。(三)前者と全く同じ特長を示す。径一二・五センチ、高四・六センチ。大きさまで全く同じである。(四)前者と同じだが内縁をめぐる低段がない。径一三センチ、高五・一センチ。刀子は先端部を欠き又頸部も折れている。
 B区第二号穴：ドーム型I様式。平面形はいちぢく形に近い形。奥巾三六〇センチ、奥行三〇〇センチ。左壁は玄室と羨道との境に僅にく字形を示すだけだが、右壁は前壁の名残が僅にみえる。盗掘されたもので内部には僅に土師細片数片を認めたに過ぎない(久里浜中学校担当)。

考 察

(1) 出土品と横穴形態とからみた古さ—八号穴から高台付須恵器長頸瓶が出土している。この横穴からは他に甕・瓶各一個が出土しているが、三者に共通する点は口縁外側に接して低い段を一つ持っていることである。これは恐らくこの時期の一つの特長とみなされるものと考ええる。この段は古墳時代後期のものには色々な形で存在するのが多いが、奈良期あたりになると殆どないのが普通である。この長頸瓶の肩は丸くて次第に底

底へこけている。この形は甕の肩の形でも同じである。この傾向もこの時期の特長とみられる。長頸瓶の底に付高台があるが、丸い底の周に高台をはりつけたものだから立てると底の方がでっぱり、ごろごろする。高台の意味が充分理解されていないためであろう。第三号穴からは須恵器の高台付坏が出ている。丸い底をそのままにしてその周に外開きの高台をはりつけたのだから安定度が悪い。このようなやり方は第八号穴の長頸瓶と似ている。然るに高台の付けられた外側に側面との間に稜を作って明らかに側面と底面とを区別していること、高台を殊更に外開きにして安定させようとしているといった点において長頸瓶の時期よりも後出のものであろうとの推定が出来る。我々は従来この坏の如く外開きの高台や、丸底が高台より下にはり出しているような手法のものに対して奈良前期のものと推定をして来た。今横穴平面様式をみると第三号穴は前壁の名残が若干残存するH様式である。H様式が奈良前期に比定される一つのよりどころとなる。第七号穴は平面様式上第三号穴よりいくらか古い。即ち前壁の残存状況が第三号よりやや強い。第八号穴は様式不明だが土師器坏の様式は第七号穴に近い。第七号穴の坏は比較的深いこと、側面が直立せず外開のものが多いこと、底部と側面との間に肩の張出の名残が低い段になって残ること、比較的側面の高さが大きいこと、この側面の高いものには中間に低い一段をもうけているものがあること、この様な形態は市内なたぎり遺跡（鬼高期に該当）出土土師坏に類似が認められるが、しかし、それよとも肩の張出がずっと退化していることが認められるのでそれより新しい時期と推定。第四号穴、第五号穴の土師坏は第七号穴に似たところがある。これは横穴様式が共にH様式である点から当然であろう。然るに第一号穴出土の土師坏はいささか違っている。

第一号穴出土の土師坏は第七号穴のものにくらべると比較的浅い倒向にあること、側面が直立するものが多いこと、底部との境の低い段が全く消滅していること、側面の高さが小さいこと。これらの特長を示す坏とは別に側面がぐっと外反するものがあり、これも比較的浅いこと、即ち第一号穴は他の横穴のものにくらべて土師坏の形態に変化をみとめるものである。第一号穴が他の横穴と異るところは様式がより退化したものである点である。即ち玄室の退化は前壁の縮少という形で進んでいる。第三号穴等H様式にあっては前壁が退化し羨道と玄室との境に残された前壁中は片方二〇センチ内外である。更に退化が進めば一〇センチとなり五センチとなり、やがて玄室と羨道との境は単にく字形を示すだけとなる（I様式）。更に退化が進めばこのく字形の張出部分も消滅して玄室側壁は一直線に羨道側壁とつづき、側壁は奥壁から羨門まで一直線で示される最末期型となる（J様式）。第一号穴はこの時期の横穴である。即ち横穴様式と年代との関係を次の如く推定する。その確実な証明は今後の多くの確実な出土品との比較に待たねばならない。

様式	該当横穴	推定	古さ
G	(No. 8) ?	白鳳期	七世紀末

H	No. 2	No. 5	奈良前期	八世紀前半
	No. 3 No. 4	No. 6 No. 7		
I	B区	No. 2	奈良中期	八世紀中頃
J	No. 1		奈良後期	八世紀後半

第七号穴からはく製なつめ玉が出ている。原料のこはくが千葉県銚子付近の石切場から発見されることは近年明らかにされた。古代には恐らくその付近の岩から崩れ出たものが海岸で採集されたに違いない。だから多くのなつめ玉は外面がひどく風化しており、なつめ形にすりへっているであろう。付近の古代人がこれを採集し、玉として作り上げたものと考ええる。房州と三浦半島の間は古代から交通路が発達していた。従ってこはく製なつめ玉もこの交通路から三浦半島に伝えられたものである。現在までに三浦半島で発見されたこはく製なつめ玉の資料は次の如くである。これら横穴が比較的古い横穴のみであることは注意を要する。

横須賀市鴨居鳥が崎横穴

同 公郷六丁目神金横穴

同 長井、長浜横穴

逗子市新宿横穴

(2) 被葬者——ふくざく谷の横穴群として此処に発掘調査した九横穴についてみるとそれらが決して或短かい時間中に営まれたものでないことがわかる。第八号穴の如く七世紀末に作られたとみられるものもあれば、第一号穴の如く八世紀末に作られたと考えられるものもある。第二号—第七号はそれぞれの間には少しずつの時間の差はあるとしても八世紀前半中に営まれたものだと考えることが出来る。そうするとこれらの横穴は一つの谷間を墳墓の谷に選定した一群の墳墓だと考えることが出来る。恐らくまだ発見されていないが第六号穴と第八号穴との間に幾つかが埋れていたであろう。それらは七世紀後半からはじめられ八世紀末まで続いて行われたと考えてよい。それが引続いた一族のものであるか一部落のものであるかわからないが、実はその頃の一部落は大体に於て一族である。然らば一群の横穴をそれら一部落の墳墓と考えてよからう。然し墳墓を営み得る者に関しては或る制限があった筈である。都では大化の新制によって墳墓を営み得る者及びその規模が定められた。庶民は地下に埋めることだけが許された。七世紀中頃である。都を遠くはなれた吾妻の地ではそれがそのまま行われたとも思われなし、又その様な位のある者がそうざらには居なかった。その制度がそのまま行われていたとしたら、このあたりでは墳墓は殆ど作ることが出来なかつたろうに、盛土の墳こそあまり発見されていないが、地下に大きい室を作る横穴は相当多い。大化の墓制が盛土のものについてのみの制限かも知れないが、南関東には横穴

という形の墳墓は相当ある。先ず大化の墓制外だと考えてよいらしい。各所の横穴群をみると皆一群中に新古があって、それらが年をおって営まれ、遂に墳墓群となったことがわかるから、七世紀末以後は少くとも部落毎に横穴を営む場所を選んでいたと考える。そして特に位を持たなくとも村の長老などは墳墓を営むことが出来たものである。そして八世紀に及んでは同一横穴群中に相当数の類似年代のものがあるから、当初は長老だけしか営まなかった横穴がやがて各戸毎に営むようになつたのではないだろうか。即ち各部落が思い思いの谷間に墳墓群を営んだと考へたい。本横穴群のあるふくざく谷が或一部落の墳墓谷であつたか二、三の部落のものであつたかわからないが、こんびら山の北側の谷にも三穴からなる横穴群があり、ふくざく谷の南隣の谷にも数個の横穴があると聞いている。又こんびら山の西方続きの南向の谷（とんねるの南）にも一個の横穴が知られているし、其の西方丘陵を越えた鏡田谷にも数個が知られている。即ち部落毎に思い思いに墳墓谷を選んだと考えてよいのであるまいか。

(3) 村落——ふくざく谷横穴群をはじめ付近の谷間に横穴を営んだ人達の村は何処にあつたかは極めてむずかしい問題である。村落と墳墓との関係がまだはつきりつかめていないからである。村落の跡は発見が困難である。村落——当時は一族の者が一群の家のかたまりを作つて一つの小さい村になつていた——あとであることを確認するには同時代の土器の散在地乃至包含地の確認が必要である。その時代から現代まで大体同じ位置に家がある場合、現在の村落の地下にそれらが埋没しているからこれは極めて発見に困難である。畑地などに土器片の散在が確認されたり、土木工事によって切とられたところに包含層が確認されることがあるとよいがこれもなかなか少ない。本横穴群付近の地形を考えると現在の久里浜湾は奈良時代頃までは山裾に僅の平地を残して四キロ近くも西方に湾入していたことが確かである。従つて此処に横穴群を残した人達の村はこの入江の岸にあつたことが充分推察できる。江戸時代末に村落のあつたのはこんびら山の北裾の砂丘地帯である。久里浜村がこれである。現在の久里浜はこれが発展したものである。この砂丘地帯には弥生式後期（前野町期）遺跡が確認されているが、古墳時代乃至奈良時代頃の遺跡は確認されていない。こんびら山古墳と前後する時代の墳墓として海蝕洞窟を利用したものが住吉神社背後に発見されているから、何処かにこの時代の生活遺跡がなくてはならないのだが、久里浜部落には確認されていない。大部分が旧軍用地となつていた関係でそれが今は米軍使用地になつているから調査が出来ないのである。然しその接続地である西方尻こすり坂下の宇蓼原の畑地（今は米軍使用地内）からは古墳時代遺跡として土師器須恵器片の外多数の埴輪片も発見されているし、その西方に続く宇八幡の八幡社境内及び其付近から埴輪円筒片数個が採集されていることなど、この辺に古墳時代村落の存在が推察される。又八幡社の南ますみ谷入口畑地からは土師器片須恵器片が相当量検出され、又久村入口の畑地（しまばたけと称するところ）にも同じ土師器片須恵器片が出るし、付近の山裾畑には貝塚（土師器片を含む）もある。八幡社付近からは土師器片や布目瓦片が採集されたこともある。これらは入江の岸に村落が散在していたことを充分物語っている。然もその時期は奈良時代に推定される。これら入江

の岸に散在した村落の総称名を「久里」とよんだと思う。恐らく誤でなからう。「久里」の海岸だから「久里浜」である。里は村の古称である。江戸時代にこの一部に「久村」があったのは「久里」の名残である。古代には村を里とよんだ。各県に〇〇里とよばれる町村があり、小字があるのは古代の村の名残である。千葉県君津郡久留里町久留里、安房郡平群村平久里、同館野村安布里、静岡県賀茂郡安良里村安良里、神奈川県山北町尺里、横須賀市久比里などそれである。久比里は隣接地である。当時は入江の対岸である。「久里」の中心は今の八幡から蓼原へかけてのあたりだと考えられる。それは砂洲が早くから発達して村落選定のよい条件になっていたからである。八幡社付近から和泉式土器が発見（同所相良保氏所蔵）されていることから既に古墳時代中期にこの付近に村落の芽生があったことを認めてよからう。更に久里浜の砂丘上に包含される前野町期土器の存在は既にこの入江の岸に古墳時代前期に住民の存在を物語るものでなくてはならない。これはやがて入江の岸に「久里」として発展したものと推察されよう。

(4) 村落と墳墓——村落と墳墓との位置関係については、まだ充分な結論が出ていない。時代と共にその関係は変わったようである。今までに確められたところでは古墳時代後期においては谷の出口に出来た砂丘上に村落が発達し、その谷の出口の山端に横穴を営んだ（横須賀市鴨居・鳥が崎例、三浦市初声町三戸例）ようである。奈良時代になると谷の出口にあった村落は前代から引つづいた谷の出口の山端に横穴を営んだもの（鳥が崎例）、付近の別の谷に営んだもの（横須賀市鴨居字腰越とたたら浜横穴群との関係の如き）、背後の谷奥に横穴を営んだもの（藤沢市片瀬川左岸包含地と背後谷横穴との関係の如き）などがある。足柄下郡橋町の羽根尾横穴群などはその前面の河岸段丘に土師器の散在地があるから背後の谷を選んだ例になる。この頃になると背後に適当な谷がなければ付近の谷とか一尾根越えた向側の谷とかを選んだようである。今、本横穴群においてはその谷の出口には生活跡はなかったようであり、こんびら山を越えた山裾にもはっきりした生活跡は発見されていない。これは調査が出来るない関係からであるが、これに続く付近一帯の山裾（一帯に米軍使用地）に多分土師器の埋没地があるものと考えられる。これらは山裾つづきで八幡や久村辺の山裾の村落跡に点々と連絡するものと思われる。久里浜から八幡に続く山裾に遺跡が発見されたら、それら村落と関係の深い墳墓であったと考えてよい。若しなかったとしたら八幡・久村辺に遺跡を残した人達の墳墓と考えてよい。どちらにしても「久里」の人達の墳墓であることに間違はないものと考ええる。対岸「久比里」の人達は吉井城山横穴群、吉井横穴群、大浜横穴群、長磯横穴群など久比里付近に埋葬されたことが明らかであるから、南岸「久里」の人達がこんびら山付近一帯の谷間を墳墓の谷に選定したことは当然であろう。

結 び

こんびら山前方後円墳は既に後円部を削りとられていたため何らの出土品をも出さなかったが、六世紀頃この付近で最も権力を持っていた豪族が

営んだものと考えられ、大きさ及び形の類似から池田の大塚前方後円墳と共に相接した二代の豪族の墳墓と考える。こんびら山南山腹ふくざく谷横穴群は七世紀末頃から八世紀末にかけて営まれた付近村落に属する墳墓であり、こんびら山前方後円墳とは直接の關係は考えられない。この地を墳墓地に選定した人達の村は当時深く湾入していた内川入江（久里浜湾）の南岸にあった「久里」であったと推定される。久里は当時内川入江の対岸にあった久比里と共に入江の岸にあった村で、彼等は恐らく房総半島との間に行われた盛な海上交通に働いた人達であったと考えられる。

遺物発見地地名表 (一)

横須賀市大矢部町深谷奥山上	縄文早期無文及び楕円押型文土器片	赤星直忠
同 薬師堂山	弥生式土器片(時期不詳)	同
同 小矢部町大松寺墓地付近	縄文カソリE式土器片、弥生式久ヶ原式土器片	同
同 高石谷	弥生式久ヶ原式土器片、大形蛤双磨石斧	島崎定吉
同 米の台	弥生式久ヶ原式及び前野町式土器片	赤星直忠
同 公郷町曹源寺東方	弥生式久ヶ原式土器片、堅穴家あと	同
同 同 裏山	弥生式前野町式土器片	横須賀高等学校考古学部
同 坂本中学校内	縄文勝坂式土器片、打石斧	坂本中学校生徒
同 不入斗町西来寺裏山	同	岡本勇
同 同 御嶽神社南山上	同 カソリE式土器片、弥生式土器片	坂本小学校児童
同 逸見町安針塚山	同 諸磯式土器片	佐藤英雄
同 同 北方開墾地	同 土器片、黒耀石片	同
同 八幡町八幡神社東方	土師I和泉式土器	相良保
同 浦賀町矢津坂民生寮付近	弥生式久ヶ原式及び和泉式土器片	青木清次
同 武山旧海兵团内岩崎山	縄文茅山上層式土器片	須賀由也
同 武、きつね坂	同 同	青木好美
同 鴨居町三軒家海岸	和泉式土器片	赤星直忠
同 吉井町吉井城山東側山腹	同	久里浜小学校児童
同 逗子市沼間ポンプ所東方山上	茅山上層式土器片	鈴木紀夫